

## 2002年ノーベル経済学賞決まる ダニエル・カーネマン氏とバーノン・スミス氏の業績について

大阪大学社会経済研究所 西條辰義

### ■ 制度設計を被験者実験で検証

私が一番最初に経済学を学んだテキストの1章には、大きなバツテンがある。右上がりの供給曲線と右下がりの需要曲線である。その交点で取引が決まる、と書かれている。生まれてこの方、このようなバツテンをみたこともなければ、そのようなバツテンを想像して買い物をしたこともない。胸にわだかまりを残したまま、大学院に進み、職を得て教壇に立つようになる。

80年代の後半、カルフォルニア大学でマイクロ経済学を教えていた頃のことである。当たり前のことのように、公共財がある場合には、人々は公共財の便益に「ただ乗り」するため、結局、善意のみでは公共財は供給されない、と教えていた。図書館でジャーナルをめくっていると、公共財供給実験の論文に出会う。ただ乗りしない被験者が結構いるらしい。ほんとうだろうかと思う。

バーノン・スミスという名前が参考文献の至る所でみられる。ああ、思い出した、あのカウボーイである。ミネソタ大学の院生の頃、彼がカウボーイそのままの出で立ちでセミナーにやってきた。半分、怖いもの見たさという感覚で話を聞いた。驚いたことに中身は制度設計の話が被験者実験で検証する、というものだった。ただ、私を含め、聴衆の多くは経済学でまともな実験など不可能だと思い「してはいけない研究」との印象を濃くした。

マイクロ経済学の講義でためしに公共財供給実験をやってみる。実験研究者たちと同じような結果を得る。「なぜだ？」と考え始め、少しずつ実験にのめり込むようになる。

### ■ 需給の法則はほんとうに成立するのか

いろいろ調べているうちに、スミスの主要な業績のひとつが、バツテンの交点の部分で取引が起こるような具体的な制度を発見したことであることに気づく。様々な取引方法のうち、とりわけダブル・オークションの性能がよいことを数多くの実験を通じて発見したといってよい。売り手も買い手も価格と数量をアナウンスする。相手がのってこなければ、別の価格と数量をアナウンスする。全員がこのアナウンスメントに関する情報を入手できるように黒板に書いたのである。取引したい相手がいたら、相手のオファーを取るのである。これは日本でいう「ザラ場」である。

こんなことは当たり前だと思うかもしれない。しかし、誰も経済学の根幹に関わる需給の法則が成立する環境を識別してこなかったのも事実である。

「ザラ場」では、売り手も買い手もバツテン全体の情報を知っている必要はない。実験では、買い手にはその財の購入にあたって最高限度払ってよい価格、売り手には財のコストが知らされるのみである。被験者には、たとえば売り手の場合、販売価格からコストを引いた利益に比例する謝金が支払われる。「ザラバ」というメカニズムが均衡であるバツテ

ンの交点を内生的に発見するのである。

### ■ 人は合理的に行動するのか

スミスの実験は、被験者間の相互依存関係をみる、というものが中心だが、一人の被験者がどのように意思決定するのか、という実験をカーネマンやタバスキらの心理学系の人々が60年代頃から精力的に実施していることに気づいた。

彼らの実験研究も、経済学の根幹にかかわるものである。被験者が経済「合理的」に行動しているかどうかを問うているからである。経済合理性はどちらかという外向きとか将来に向いている。不確実な状況に直面する経済人は、得られる情報をすべて駆使して、自己の利得が最大になるように意思決定する。いわば、最適計算をするブラックボックスが経済人である。一方、心理学系の研究者のみる意思決定者は内向きとか過去に向いている。直近に起こったことや感情も意思決定に大きな影響を与えるというのである。

期待効用理論では、損と得を区別しない。一円は一円なのである。一方、カーネマンらは、不確実性に直面する主体の「損」と「得」が違うことを実験室で発見した。たとえば、株を千円で購入するとしよう。もし株価が50円下がるとすると、金額以上に心理的負担を感じる、というのである。つまり、株価下落は株を購入するという意思決定が失敗したことによる心理的負担が発生するのである。損失回避という現象である。

近年の行動経済学や行動ファイナンスは、個々の主体の経済人とは異なる意思決定の結果が集団全体に影響を及ぼすことを議論している。個々の主体の間で少し変わった（経済合理的でない）意思決定がなされても、全体でみるとあたかも経済人の意思決定の集計であるとするなら伝統的な経済学は救われるかもしれないが、そうでもないらしい。

### ■ 社会科学における実験の重要性

経済学における理論と実証のリンクは強いとはいえない。実証研究で複数の理論の中からひとつを選択できないことがある。そもそも理論モデルは現実の経済とはかけ離れてデフォルメされているし、人々は理論モデルで想定しているようには行動していないかもしれない。さらには、データそのものも経済外的な要因で汚染されている可能性が高い。

これに対し、スミスやカーネマンたちは、従来の経済学の欠陥を補うために、実験を用いて理論を検証するという新たな手法を用いたのである。

20世紀においては、伝統的な経済学は細分化を深め、分野が違っていると議論ができない方向に発展した。この背後で、実験研究を通じて、経済学、心理学、社会学などの研究者は互いに緊張関係を保ちつつ、ある意味で社会科学の総合化を経験し、新たな地平を開拓してきたのである。